

～歩くひと、自転車や電車・バスに乗る人、本を読む人を応援します！～

交通・環境・まちづくり おすすめ図書

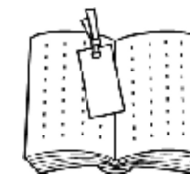
2013

■ 目次

世界が賞賛した日本の町の秘密	2
鉄道復権 ー自動車社会からの「大逆流」	3
鉄道で広がる自転車の旅ー「輪行」のススメ	4
自転車はここを走る！	5
自転車の安全鉄則	5
自転車が街を変える	6
のりもの進化論	6
ここが違う、ヨーロッパの交通政策	7
トラムとにぎわいの地方都市	
ストラスブールのまちづくり	8
クルマ社会・7つの大罪	9
江戸に学ぶエコ生活術	10
子どもが道草できるまちづくり	11
まち路地再生のデザイン	
ー路地に学ぶ生活空間の再生術	12
「都市縮小」の時代	13
グリーン・エコノミー	
ー脱原発と温暖化対策の経済学	14

【各ページは下記の会員が担当しました】

2, 5, 9, 11, 13	堀 添
3, 4, 10	野 口
6	高 橋
7	山 脇
5, 8, 12, 14	井 坂



地域交通出前講座シリーズは、毎日の生活に欠かせない身近な地域交通に関する最新情報や専門家の講演などに気軽に接していただけるようお届けし、人と環境にやさしい地域交通に関する情報収集の一助になるよう企画・頒布しています。

■ はじめに

2010年1月に初めて発行した『おすすめ図書』シリーズは、当初はイベント会場を中心に配布を行いました。後に一部図書館などのご協力を得て多くの皆さんにお届けできるようになり、おかげさまで好評をいただき、この度4回目の冊子をお届けできる運びとなりました。配布にご協力いただいた皆様、本会にご支援いただいた皆様、多くの本を読んで書評を書いてくれた皆さん、そして本冊子を手に取ってくださった皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

この『おすすめ図書』冊子をつくるきっかけになったのは、交通・環境分野の本は多くあるものの、残念ながら小説などと違って多く売れるわけではないので、書店や図書館では新刊ラッシュの中で埋もれてしまい、皆さんの目に留まる機会が少ないのではないかと。そうした本の中から市民目線で読みやすい本を発掘して紹介できたら有意義では、という会員の着想から始まったものです。

2011年3月の東日本大震災で原発事故が起きた際も、マスメディアの情報が政府発表中心に偏っていると指摘される中で、十分な情報が入ってこないと不安に思う私たち一般市民の手の届く所へ多様な情報を届けてくれたのは書店や図書館でした。出版不況と言われますが、交通関係に限っても毎年多くの本が出版されており、この『おすすめ図書』2013年版では、前回以降に発行された新刊から選りすぐった7冊の本を新たにご紹介しています。

一方、これまで巻末に収録していた図書目録は、本が年々増え続け、さらに昨年以降急速に増えつつある電子書籍なども含め変化に直面している中で、ご紹介の仕方を一旦整理すべく、今回は割愛させていただきました。

もともと、毎日の生活の中で当たり前のように利用している地域交通も、よく見ると様々な問題や変化に直面しています。書店や図書館に出かけてみれば、テレビや新聞だけは得られない埋もれた情報を得ることができます。本冊子が、多くの情報に触れ、新たな気づきを得るきっかけになりましたら望外の喜びです。

持続可能な地域交通を考える会 (SLTc)

代表 井坂 洋士



世界が賞賛した日本の町の秘密

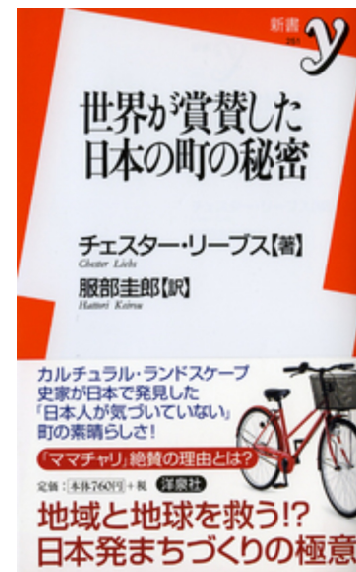
持続可能な社会を築く上で「ママチャリは日本が生んだ宝」と聞いて、多くの人がにわかには信じがたい思いを抱くに違いない。だがアメリカの都市文化史専門家であり、日本でも教鞭をとりながら実際にママチャリを使って暮らした経験から、著者はそう断言する。カギとなるのが、スポーツ自転車とは異なる特徴、ママチャリで用が足せるコンパクトな自転車町内、非常に優れた公共交通機関ネットワークの存在だ。本書は日本人の私たちには当たり前すぎて見過ごしてきたものに温かな光をあてる。

以前に比べ自転車はマスコミでも頻繁にとりあげられるようにはなった。しかし往々にして「傍若無人な自転車が増えて危険」というネガティブなものか、スポーツ自転車の「エコでヘルシー、かっこいい」面だけ強調する“ポジティブ”なものの両極端で、両者皮相的であるのにかわりない。ヘビーユーザーの私自身ママチャリは「ダサいもの」と信じて疑わず、よもや「先進的なライフスタイル」と考えたことなどなかった。それだけ買い物など日々の暮らしにおいて、自力で容易に移動できることがどれだけ恵まれた

ことかわかっていなかったということだろう。社会をよりよく変えるには全体を見ながら身近な部分にきちんと意識を集中すること。その担い手はママチャリのように平凡だが毎日一生懸命生きている一人一人。本書からそう励まされている気がする。



チェスター・リーブス 著、服部圭郎 訳／洋泉社新書y
2011年、ISBN 978-4-86248-794-0



鉄道復権 自動車社会からの「大逆流」

書評としては邪道になるかもしれませんが、個人的に著者を存じ上げており、本稿作成中にお会いする機会を得た折、「本書で一番訴えたかったのは何ですか?」と直接伺いました。その回答を本書より抜粋すると、「過去の成功物語に囚われず、目先の収支だけではなく長期的な視野で物事を解決していくのかどうか。この点こそが、日本が豊かな成熟社会へ転換して行くうえで、一つの重要な鍵であるように思う」となり、自分の読後感に照らしても納得できました。

第1章では、山手線の成立や1920年代に全線20kmを一挙に開通させた小田急の利光鶴松などの事例を示しながら、日本が鉄道先進国となる軌跡が書かれています。第2章では、近年になり欧州が交通政策の転換により、衰退産業だった鉄道を復活させてきた経緯が紹介されています。以降、鉄

道復権により都市再生を次々と成功させる欧州各都市の動きを豊富な事例に基づき紹介し、「鉄道を見直す世界、見捨てる日本」の帯文字通り、そうした世界の動きとは反対に日本の鉄道が地方都市を中心に衰退に向かう事例との対比で、よく理解できます。第7章では、費用便益の考え方等の紹介により、鉄道復権の意義が分かりやすく説明されています。

本書は、鉄道や交通に詳しくない方でも、読みやすく理解しやすい作品です。特に、冒頭紹介した「過去の成功に囚われず…」という著者の主張は、鉄道に限らず、わが国が直面する経済・社会の

様々な分野に共通するテーマでないかと思います。

ところで、著者は日本銀行勤務、海外留学、大学講師などを経ながら、LRTや鉄道等の研究を続けてこれ、現在は関西大学教授に就かれるなど多彩に富んだご経歴をお持ちですが、LRTを語らせればこの方の右に出る方はいないと言える位、ウィットに富んで分かりやすい講話をされます。もし、講演会やセミナーで講師に同氏の名前を見かけられましたら、こちらも是非聴講されますよう「おすすめ」します。

宇都宮 浄人 / 新潮選書

2012年、ISBN 978-4-10-603701-6

鉄道で広がる自転車の旅 「輪行」のススメ

「輪行」と書いて「りんこう」と呼びます。昨今の健康とエコ志向に加えて、東日本大震災の影響も加わり、スポーツから通勤まで、様々な目的で自転車を利用する人が増えましたが、輪行もそのジャンルの一つで、鉄道に自転車を積んで旅行することです。本書はサイクリング未経験者から中上級者、鉄道ファンまで幅広い層をターゲットとした、輪行に関する分かりやすく楽しい内容の解説書です。

自転車の旅…には、ほろ苦い思い出があります。少年時代は自転車が好きで、ミヤタのランドナーの愛車を駆って、いつかは各地をツーリングしようと夢見つつ、週末毎に多摩川サイクリングロードを走ってきました。しかし、自動車免許をとり、社会人となるにつれて自転車から離れてしまい、いつしか愛車は車庫の片隅に朽ちるままとなり、家の建替えを機に手放してしまいました。

今、約20年の時を経て仕事で自転車に乗る機会が増えたことから、かつての自転車熱が復活し、どんな自転車を買おうかと物色中のところで本書と出会いました。著者とは同年代で名前も浩の字が同じというのも奇遇です。

体力に溢れ、社会人になる前ですらできなかった自転車旅行。本書で指摘されている通り、交通混雑を避けて都心を抜けつつ、限られた行動範囲・日数・体力によるツーリングには限界があります。ところが鉄道を利用する「輪行」では、そうした障害がほとんど取り払われることを知りました。また、本書では輪行に使用する自転車について、ロードバイクから折り畳み自転車までの長所短所と活用方法を丁寧に解説しています。さらに鉄道旅行の魅力と輪行のお勧めコースまで紹介していますので、単なる解説書としてではなく、旅行物としても十分に楽しめる著作となっています。

交通や環境問題に取り組み、クルマ社会からの脱却や公共交通・自転車利用促進を進める活動に取り組んでいます。こうした「趣味」を活かし、楽しむことで、交通に関するライフスタイルを変えることもできると気付きました。

なにはともあれ。さあ、自転車好き、旅好き、鉄道好きな方、本書を手にして、輪行に出てみましょう。おっとその前に
どの自転車を手にしましょうか。



田村 浩 / 平凡社新書 520

2010年、ISBN 978-4-582-85520-3

自転車はここを走る！

足田智、小林成基／樫出版社

2012年、ISBN 978-4-7779-2261-1

「自転車は車の仲間」。本書を読み、改めて胸に刻んだ原則だ。交通問題に限らないが、世の中はどんどん複雑化し、これまでは上の空でいても問題なかったことが（実はトラブルがなかったのは運がよかっただけなのだろう）、今や大失態や大事故につながりかねない。道路で関心が払われてきたのも専ら自動車やその事故で、良くも悪くも自転車は脇役だった。

だが、環境・健康意識の高まりが自転車活用を促し、深刻な銀輪事故も目立つようになってきた。そんな状況下の2011年10月、警察庁は全国都道府県警に「自転車交通総合対策」なる通達を出す。それは自転車の走り方につき原則を示し、曲がりなりにも無関心状態に一石を投じた。だがほぼ無秩序状態のところいきなりの強硬姿勢と映り、メディアのミスリードもあって混乱と戸惑いに拍車をかけている。

本書はタイトル通りその疑問に本質的な答えを提示する。「車両である自転車は車道を走るもの。そして車道を走るほうが安全」と。「車道が安全」には勿論諸方面にわたる条件があり、それにそわちがよく考えるべき事柄であることを本書は示す。

写真やイラストも豊富、実態に即した自転車関連法規の守り方もよくわかる。ただ、われわれママチャリ族の“おばちゃん”も、ひとたび道理を解すれば精鋭部隊となる仲間であると、著者各氏には申し上げたい。



自転車の安全鉄則

自転車にはいつも当たり前に乗っているけれど、実はどこを走ったらいいかもよく知らない……そんな人も少なくないかもしれません。歩道を走る人が多く、左右も構わず走ってしまいがちな自転車ですが、著者は自転車事故の傾向を分析するとともに自転車活用先進国のオランダ、ドイツ、デンマークなどの事例も交えつつ、自転車で「左側通行さえ守れば、年間約400人の命を救える」と訴えます。

毎日乗る自転車だからこそ、安全に、安心して乗りたいもの。すでに自転車に乗っている人にはもちろん、正しく使えば健康に、

環境に、そしておサイフにもうれしい良いことづくめの自転車利用をこれから始めようと思っている人にも、頼もしい参考書になってくれそうです。

足田智／朝日新書147

2008年、ISBN 978-4-02-273247-7

自転車が街を変える

秋山岳志／集英社新書

2012年、ISBN 978-4-08-720670-8

解説者の独断ですが、本書は自転車事情に関して中級者・上級者向けの最新事情を紹介したものです。きっちり学びたい方はまず、足田智『自転車の安全鉄則』（朝日新書、前ページ参照）等で基本的な知識を身に付けた上で、本書を読む事をお薦めします。以下本書の核心だけ紹介します。

—自転車とクルマをごく一部の区間だけ「分離」しても、あまり安全にはならない。自転車とクルマが道路を「共有」する自転車レーンがあちこちに連続してネットワークを作る事が肝心。そこで参考になるのがイギリスの自転車政策だ。ロンドンでは渋滞税を課す事でクルマを減らした上で、「サイクル・スーパーハイウェイ」という自転車レーンを設けた。結果的にはクルマが半減、自転車が倍増した。他にも鉄道に自転車を載せる話、シェア・サイクルの話等の最新事情が細かく紹介されています。



のりもの進化論



この本は、超光速で宇宙の果てまでという話ではなく、最小のエネルギーで最大の移動能力をこの社会でいかに実現していくか、可能な限り著者が様々な乗り物に自分で乗った上で論じたものです。

一方で人力の乗り物の可能性を最大限に考え、他方で自動車の過度なパワーを抑えようとすると、両者の行き着く所が重なってくるのが面白い所です。人力で自動車と同程度の利便性を得れば、事故や公害等のツケを回さずに済みます。著者が行き着いた「電動アシストつきペロモビル」とはいかなる乗り物なのか？

その人力の乗り物を公共交通機関に載せれば、「長距離は鉄道で移動し、駅からは人力で自由自在に」という効率の良い移動が実現できます。著者は超高速列車の話でなく、日常的に乗る身近な都市交通について、費用や利用のしやすさといった観点から、良し悪しを論じていきます。

松浦晋也／太田出版

2012年、ISBN 978-4-7783-1323-4

ここが違う、ヨーロッパの交通政策

1970年代のオイルショックの後、ヨーロッパではエネルギー政策が見直され、無数のマイカーによってもたらされる交通渋滞、大気汚染に目が向けられました。ヨーロッパの各都市は環境に配慮して市の中心部から車を排除または抑制する、様々な交通政策を実施するようになっていきます。



片野優
ここが違う
ヨーロッパの
交通政策

街が変わる、楽しくなる!

環境に配慮した人間的な都市生活を
実現するための情報と提案。
官庁・自治体・学生・市民団体の必読書です。

権利」が保証されています。その流れがEU憲章に引きつがれヨーロッパ諸国に及んでいて、実施においては市民による事前審査が行なわれることもあります。

モビリティ・ウィークについて述べると、これは9月に催される、市民の健康や生活の質の観点から都市交通を考える交通週間です。その中心的なイベントはカーフリー・デーと呼ばれ、市民がクルマ無しの1日を体験することによって公共交通や自転車の利用を推進し、それらの環境整備を促そうというものです。

このモビリティ・ウィークを日本の交通安全週間と対比してみると、本書が都市交通に携わる行政や企業、学界の関係者だけでなく、都市交通に関心を持つ市民、学生に多面的で豊富な情報を提供することが分かるでしょう。

片野優／白水社

2011年、ISBN 978-4-560-08124-2

トラムとにぎわいの地方都市 ストラスブールのまちづくり

ストラスブールは、フランス東部アルザス地方の人口26万人ほどの地方都市ですが、トラム(路面電車)導入などの交通まちづくり政策で世界の注目を集め、フランスを代表する環境都市として知られています。本書では、この街に住み変化を目的の当たりしてきた日本人ジャーナリストが、3代の市長や関係者へのインタビューと実体験に基づき、ストラスブールが「にぎわう地方都市」になったいきさつを紐解いてゆきます。

本書は巷によくある技術論ではなく、民主的な手続きや、国と地方の関係などの政策を実現する仕組みに着目しているのが新鮮で、トラムに限らず新しい政策を導入することが苦手な私たちの参考になると感じました。例えば、市民や政治家などが理念や哲学をぶつけ合って事業計画を決めていくコンセルダシオン(事前協議)や、次の施策を行う前に実施する事後評価など、日本でなおざりにされている市民参加の手続きがきっちり整備されている様子がうかがえます。

もっとも、こうした手続きが昔から整備されていたわけではないようで、フランスも以前は中央集権的な体制だったものが、ここ数十年の分権により序々に整備されてきたのだそうです。他にも「縦割り行政」や政策に詳しい行政職員が育たない問題など日本でもよく言われる問題点が共通するようですが、フランスではプロジェクト実施に際して外部登用の専門職員を配置するなど、乗り越える工夫がされているのだそうです。もちろん、市長のリーダーシップも欠かせません。本書のインタビューに答えた元・前・現市長が、「住みやすいまち」の定義や政策の理念などを自分の言葉でしっかり語っていた様子が印象的でした。

技術も資金もある日本でトラムが出来ないことを疑問に思っている方は少なくないと思います。かく言う評者もその一人でしたが、本書を読んで、日本に足りないものがあるのかと実感されました。トラムに限らず新しい政策を実現したいと考えておられる方、立法・行政の立場から地方主権を実現したいと思っておられる方などに、お勧めしたい一冊です。



ストラスブールの
まちづくり

L'urbanisme de Strasbourg

ヴァンサン・藤井由実／学芸出版社

2011年、ISBN 978-4-7615-2518-7

クルマ社会・7つの大罪 アメリカ文明衰退の真相

“自動車普及の最大の理由は、アメリカ国内の経済事情として永続的にブームが続くような耐久消費財産業が必要だったこと”。本書がそう指摘するように、必要だから作るというよりも、作ってから必要を生み出すところから、様々な問題が生じてくる。もちろん、有用な面は大いにあり、クルマなしでは社会は成り立たない。しかし、売り手の利益が優先されすぎた結果どうなったか。本書は、そのうちアメリカで生じている主な弊害7つを取り上げる。これまでも多く指摘されてきた共同体の崩壊や文化の衰退などから、味覚やベトナム戦争帰還兵の問題など、クルマとは縁遠いような点も指摘されていて興味深かった。



経済事情とともに、人々のメンタリティの違いが、どのような車種が売れるかに反映されるかなど、日米の比較も随所に出てくる。その違いは鉄道の存続にも影響し、日本では大都市中心部での鉄道の繁栄が、犯罪発生率の上昇を非常に安上がりで効率的に防いでいるという。これらは実際にどうなのだろう。考えた、話しあったりできる素材も多い本だ。

クルマという巨大だがすべてではない道具で、アメリカ社会の一面を描き出す試みなので、やや強引かなと思われる部分もある。それでも冒頭のように、はからずも資本主義的生産様式自体の問題点も浮かび上がってくる。また

本書は日本の現状や未来については楽観的過ぎる気もする。しかし、鉄道を筆頭とする公共財産が残っていることがどれほど大事か、その他あまりに普通すぎて意識してこなかった日本の強み(競争力ではなく)が実はどれだけあるか、そうしたことに関心を向けるきっかけになる本ではないかと思う。

増田悦佐／PHP研究所
2010年、ISBN 978-4-569-79020-6

江戸に学ぶエコ生活術

本書はアメリカ・ルイジアナ州出身の日本建築などを専門とする研究者による著作です。これまで建築関係で外国人作家の翻訳本を読んだ経験はありませんが、読書を決めた理由はひとえに「江戸」と「エコ」のキーワードに惹かれたからに他ありません。

著者は、江戸は当時世界で一番環境にやさしい時代であったと評しており、江戸時代の農民・町民・武士の生活がいかに持続可能なシステムであったかについて分かりやすく、絵図を交えて丁寧に紹介されています。日本人でありながら、本書で紹介されたエコ生活術についての知識不足を知り、また、江戸では欠けた茶碗のかけらを捨てることも「恥」と思い、人に見つからないようにしてきた話には、まだ使えるものでも平気で捨てる現代の我々の生活術について改めて考えさせられました。

本書の特徴として、江戸の生活術を単に紹介するだけではなく、現在への応用について論じている点が挙げられます。交通を例にとれば、江戸の町は水路を活用し、歩行空間を大切にすることで、住民のコミュニケーションを豊かにしてきたことから、現代も歩きやすいまちづくりや、歩いて買い物に行ける商店街を大切にすることが必要であることが説かれています。

読み進めるうちに、川崎市多摩区の「日本民家園」を思い出しました。4年前に改築した我が家は50年持つ鉄筋住宅と説明を受けましたが、日本民家園の古民家は手入れを続けつつ100年以上経ち、建材も国内で自給自足できる木材等であることから、エコの点では、現代よりも江戸の方に完全に軍配が上がります。

もし、機会があれば、古民家で囲炉裏の前に座り、本書を読まれながら、「知足」(知るを足る)について思いをめぐらせてみては如何でしょうか。

アズビー・ブラウン 著、幾島幸子 訳／阪急コミュニケーションズ
2011年、ISBN 978-4-484-11101-8



子どもが道草できるまちづくり

通学路の交通問題を考える

本書は、地域の身近な「道」を子どもたちの手に取り戻すことを通じて、社会全体で子どもの成長を支えようと提起するものです。「社会全体での子育て」といって、保育園や学童保育の充実などが真っ先に思い浮かびますが、「道」や「道草」も、子どもが育つためのとても大切な要素なのだと気付かされました。



そして過剰なクルマ依存が、その貴重な場を損なっていることも、様々な角度から明らかにされます。私自身、「道はクルマがまず使うもの」という先入観に縛られていたことを痛感しました。

子どもにとっては、大人の介入を受けないで、自由に遊びの拠点を移動できることがどれだけ大事か。いわば地域全体が遊び場であり、生活の場であってこそ、成長に必要な営みが可能になることを、本書は

教えてくれます。その

ためには、物理的に、道を人が優先される場所にしなければならない。それはまさに社会全体で取り組まなければ、実現できません。逆にそのような苦労を共にすること自体、社会のきずなを再生することでもあります。

本書の執筆陣は、子どもをその過程の単なる客体にとらえてはいません。子どもはともに社会を変える仲間という想いが伝わってきます。問題発見・解決には、そうしたまなざしと想像力が不可欠であることも、本書は

訴えているのではないかと思います。

仙田満 + 上岡直見・編／学芸出版社
2009年、ISBN 978-4-7615-2463-0



まち路地再生のデザイン 路地に学ぶ生活空間の再生術

右の写真(表紙オビ)を見て、どんな感想を持つだろうか。懐かしい、昔を思い出す、歩いてみたい……または窮屈だ、古めかしい……人それぞれ、いろんな感想が出るだろう。本書は、日本人の誰もが思いを馳せることができる割りに、忘れられがちな「路地」に焦点を当てた本だ。

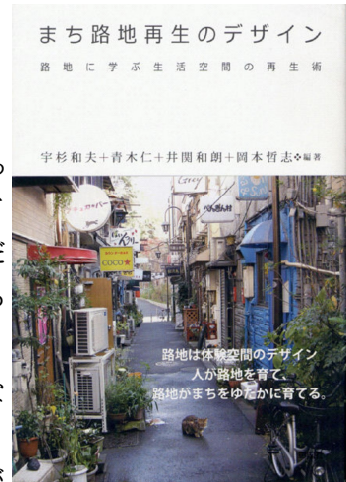
国土交通省は「大街区化ガイドライン」を策定するなどして、細街路はむしろ改善すべき対象と考えられている。道路は拡幅すべきものであり、建物は大型化する方がよいとの考え方が主流だ。本書が「人々が地域で育みつくりあげてきた体験空間のデザイン」と評する住民により作られた細街路は劣るもので、地縁の無い「専門家」がデザインした空間の方が優れていると考えられているわけだ。

ところが、建築の専門家である本書の著者らは、むしろこれまで200年かけて築かれた路地にこそ持続可能性があり、21世紀の日本の都市・まちづくりの目指すべき姿だと訴える。いわばオルタナティブ(もうひとつの路)を提示している。

本書では、クルマの円滑な走行のための空間を「道路」、クルマより人のための空間を「路地」と区分し、この両者は似て非なるものだと指摘する。江戸期から現代にかけてのまちの形成を説明した上で、「路地」は決して劣った空間ではなく、様々な事例を示しながら、むしろ「路地」の持つ魅力を残すことを提唱する。

建築の専門家が書いただけあり、都市計画の専門用語が出てくるなど少々読みづらい部分もあったが、そうした箇所は流しながら読み進めてもいいだろう。

私たちは、やもすれば「道路」＝クルマの事ばかりを考え、「路地」を意識する事は少なかったのかもしれない。また都市計画の現場では、クルマや「ハコモリ」の話は頻繁に出て、街の主役である「人」に思いを馳せる機会がどれ程あったらうか。本書が指し示す先には、日本の「まち」の原風景とともに、私たちが目指すべき道が描かれているようにも思えるのだ。



宇杉和夫・青木仁・井関和朗・岡本哲志 編著
彰国社、2010年、ISBN 978-4-395-01021-9

「都市縮小」の時代

今、世界各地の都市で、人口減少と街の空洞化など「都市縮小」現象が起きているという。それにともない、治安の悪化、税収の悪化と行政サービスの削減、ひいては地域社会の崩壊など、看過できない問題が生じている。アメリカのある都市では、主要産業の衰えにより、40年で人口が17万人から8万人に減少した。街の中心部には空き家や廃ビルが目立ち、「時々空き家で死体が見つかるが、問題にもされない」という荒涼たる風景が広がる。本書は、このような危機的状況に対し、街の再生を果たそうと奮闘する各国各地域の取り組みを紹介する。その際、著者が提唱するのは、「発展や拡大」ではなく、「縮小を生かす」という方向だ。

国の財政状況の厳しさが喧伝されて久しい。無駄を削るのも大切だが、新たな産業を興すなどもっと元氣の出る解決策を考えたいのではないのか。そう思い込んできた自分にとって、本書の「賢く衰退する」というキーワードはまさに驚きだった。しかし、本書の言う「衰退」は、決して諦めの態度ではない。逆に、主体性や創意工夫をより必要とする積極的な姿勢だ。例として取り上げられているデトロイトを見てみよう。自動車都市として脚光を浴びたこの街は、その自動車自体によって「分断都市」に陥った。自動車優先で公共交通機関が失われ、富裕層が住む郊外と、貧困層の住む地域が隔絶されている。後者には放棄された宅地や工場跡地が4万区画にも上るという。

市当局がカジノ等の建設で再興をはかろうとしたところ、自動車会社の組合活動家や地域住民の運動により、そうした放棄地を農地として再利用する試みが行われている。

目指されているのは、地域循環型の経済社会だ。消費するだけのクルマ生産偏重から、自分たちの手で働く場を生み出し、環境を守り、地域の絆を取り戻していく。莫大な利益とは無縁であるが、人間らしい生活がそこにはある。

果たしてこれから食べていけるのだろうか。多くの国民が不安を抱える中、本書の示す方向性は大きな希望をもたらす。同時に「都市縮小」の原因の解明も忘れてはならないだろう。例えば人口減少の原因として、勤労世帯の労働条件の劣悪化、保育園不足など子育て環境の不備といった、それ自体解決しなければならない問題も多い。自国の産業政策や企業の活動が、他国の国民に与えている影響も見逃せない。「都市縮小」現象を知ることによって、改めてそうした問題についても考えていきたい。

矢作弘／角川oneテーマ21新書
2009年、ISBN 978-4-04-710218-7

グリーン・エコノミー 脱原発と温暖化対策の経済学

本書は、社会・経済の仕組みを「グリーン・エコノミー」（環境に調和する経済）に変えて「持続可能な低炭素社会」をつくることを目指して書かれている。新書ながら読み応えがあり、始めの頃は全体像を掴みにくく感じたが、丁寧に読み進めると味が出てくる本だと感じた。

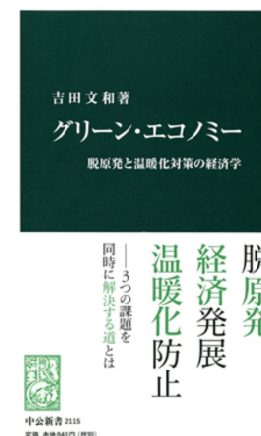
前半では、日本を含めた世界経済が抱える課題を整理しており、例えばニュースで当然のように語られている「GDP」が必ずしも生活感に合っていないことを指摘している。交通混雑はガソリン消費を増やしてGDPを増大させる一方で、快適度は減り、GDPの評価尺度に含まれない大気汚染などの公害を増加させる。このように私たちの生活感に近い所から問題提起し、従来のGDPとは異なる目標と政策体系が必要なのだと提言している。

続いて、地球温暖化対策と脱原発と経済発展を併立させているデンマークやドイツなどの事例を紹介している。例えばドイツでは「気候変動対策なくして経済発展なし」という発想に切り替え、エネルギーばかりでなく、廃棄物や交通、雇用なども含めた諸政策を統合したことで、実際に環境と経済発展の両立が実現したのだという。

一方、日本では産業界などから「省エネが進んでいる」「乾いた雑巾を絞るようだ」と宣伝されるが、本当だろうか？様々なデータを提示しながら、日本に足りないものはむしろエネルギー環境政策と社会保障政策、産業政策が連携し協力するための展望と努力であり、この最大の障害は、経済的な既得権益を得ている人間が、低炭素成長へと転換するために必要な政策に反対している事だと鋭く指摘している。

「技術は、人間社会の目的に対する手段である。手段にとらわれて目的を見失ってはならない。目的に対して手段が適合しないならば、別の手段を選ぶのも人間社会である。」という筆者の指摘を改めて意識したい。原発事故を経験した私たちが、今後の経済のあり方を考える際、ぜひ参考にしたい一冊だ。

吉田文和／中公新書2115
2011年、ISBN 978-4-12-102115-1





本冊子は、管理された森林からの木材、間伐材、古紙再生材を合わせて100%となる
森林認証を取得した用紙に、生分解しやすい植物原料インクで印刷して作りました。
(本文用紙は再生紙70%以上+国内産間伐材10%以上)

■「地域交通出前講座シリーズ」とは？

毎日の生活に欠かせない身近な地域交通に関する最新情報や専門家の講演などに気軽に接していただけるよう、冊子やPDFなどにして配布する事業です。
人と環境にやさしい地域交通について知るきっかけになりましたら幸いです。

■持続可能な地域交通を考える会 (SLTc) では…

◆人と環境にやさしい交通まちづくりに関する情報を発信しています。

- 生活道路の改善（安全で快適な歩行環境づくり） ●自転車の活用
- 路線バス・鉄道・LRT・自転車タクシー ●低炭素型の地域づくり …など

◆市民団体・地域などをつなぐ連携づくりや、政策提言をしています。

◆本冊子を含む会の活動は、行動する市民の力に支えられています。

参加して、または会費や寄付で、本会をの活動を支えてください！

詳しくはホームページにて → <http://sltc.jp/support>

地域交通出前講座シリーズ #6

交通・環境・まちづくり おすすめ図書2013

2010年 1月 30日 初版発行

2013年 6月 13日 4版（2013年版）発行

編 者 持続可能な地域交通を考える会

発行者 井坂 洋士

© 2013 Sustainable Local Transit committee.

発行元

持続可能な地域交通を考える会 (SLTc)

〒211-0004 川崎市中原区新丸子東3-1100-12
かわさき市民活動センター ブース5

[URL] <http://sltc.jp/> [E-mail] query@sltc.jp

[FAX] 020-4664-6084 [郵便振替] 00290-2-139934

持続可能な地域交通を考える会
Sustainable Local Transit committee, Kawasaki Japan.

